

いまやロシアとアメリカの戦争になっている

エマニュエル・ドット

モダン・ディプロマシー 2023年7月4日

[Emmanuel Todd: Now this is a conflict between the US and Russia - Modern Diplomacy](#)

フランスの著名な歴史哲学者エマニュエル・トッド教授が去る3月、フランスのヴァンデ・カトリック学院で、ウクライナ戦争とヨーロッパ情勢について講義を行った。教授はこのなかで、ウクライナ危機を準備し、作りだしたのはEUの政治家だと非難し、ウクライナ危機はアメリカとロシアの戦争になっていると強調した。以下は英国のインターネットメディア「モダン・ディプロマシー」が報じた教授の発言の抜粋です。

ウクライナでの軍事的憎悪の炎を煽るうえでヨーロッパが役割を果たしたと思います。第一に、EUとNATOがウクライナの国境まで拡大したことが否定的な役割を果たしました。第二に、2000年代に入り、EUがウクライナ人に迫った選択は、EUに加盟するか、それともロシアが大きな影響力を持つ共通経済圏（CES）に加盟するか、どちらかハッキリさせよというものでした。

まさにEUは、ウクライナが東西両方と協力することを許さなかったわけで、これが軍事衝突の原因のひとつとなりました。EUが下した残酷な決定により、ドンバス地方とウクライナの産業全体が厳しい試練にさらされることになりました。ヨーロッパがウクライナにすすめたのは、根底からの脱工業化であり、ウクライナを村に変えるものでした。私に言わせれば、ドイツがウクライナで追求したのは、過敏ともいえる自国の経済目標の追求にほかなりませんでした。

要するに、この悲劇は、始まった当初からアメリカとロシアの戦争でした。私は、最初の頃プーチンがウクライナについて語った2つのスピーチを覚えています。それを聞いて、目の前で歴史が作られているのを見たような感じがしました。これらの演説の目的は何だったのか。実は、それはNATOへの挑戦であって、キエフへの挑戦ではありませんでした。ロシアはNATOに挑戦するだけの十分な力があると思ったのです。私にいわせれば、ウクライナ情勢の特徴はロシア人とアメリカ人およびイギリス人の対立です。イギリス人は、主に秘密の方法でアメリカ人を助けていますが、ウクライナでは夢中になって陰謀に加担しています。まさに驚くべきことです。

ウクライナ情勢をどうみるかについては、2人の権威がいます。ウクライナ戦争が始まったときから私は2人がとても気に入りました。デビッド・タートリーとジョン・ミアシャイマー教授です。2人のおかげで、私は熱に浮かされることなく事態の真相に迫ることができました。ジョン・ミアシャイマーは最初から、事態はすべて理解できる、複雑なことは何もないと言っていました。ロシアは、ウクライナの NATO 加盟を認めないと言っていた。また、アメリカ、イギリス、ポーランド人の中からウクライナに教官を派遣してウクライナ軍を強化することは容認できないと言っていました。なぜか？それは実際にはウクライナを NATO の一員にすることだからです。だからロシアはこれを受け入れられないと表明していました。結局、ロシアは予防戦争に突入したのです。つまり、はっきりいえば、ロシアは防衛戦争を実行し、いまも行っているのです。

アメリカ人やイギリス人、ポーランド人がもてはやされていますが、彼らはヨーロッパ全体ではないし、まして EU といわけではありません。私にとって、この戦争のひとつの特徴は、欧州共同体の2本の柱であるフランスとドイツが視界から消え、実際の戦略軸がワシントン、ロンドン、ワルシャワ、キエフにあったということです。ウクライナ情勢は当初から、大陸間戦争の論理に従って展開しました。私が恐ろしいと思うことのひとつはここにあります。ウクライナ紛争が世界戦争にエスカレートする危険性があることは、かなり早い段階で明らかになっていました。

一時期、私も含め、すべてのアナリストは中国とアメリカの衝突が避けられないとみて事態を分析する準備をしていました。それが突然、本当の紛争が東ヨーロッパに移り、アメリカとロシアの紛争であることが判明したのです。

中国人は、ロシアが破壊されれば次は自分たちの番だと思っています。そして最初から、ロシア人、ロシアを支援する以外に選択肢はありませんでした。このことから私は、この紛争に中国が加われば、世界戦争の脅威に直面することになると結論づけました。

西側諸国がみんな最近になって、ロシアへの中国製兵器の供給をどれだけ心配するようになったかを思い出してほしいものです。なぜかといえば、私たちの前には米中戦争が待ち構えているからです。産業の観点から見れば、それは中国の産業と米国の産業との衝突と競争を意味しますが、中国は世界の工作機械の30%を生産しているのに対し、アメリカは8%しか生産していないのです。

イギリスに関しては、彼らの政治にはまぎれもなく狂氣的なところがあります。最近引退したトラス首相をみて私は、イギリス人がどれほど愚かであるか思い知らされました。これは新たな衰弱です。イギリスは国として、西ヨーロッパの中で最も劣化していますが、同時に最も好戦的で、戦争に熱心な国でもあります。イギリス国防省は毎日、ウクライナ情勢がどうなっているのか、どのような軍が参加しているかといった情報を発信しています。まるで、いまでも世界パワーであるかのようです。太平洋地域やその他にどう介入するかといった話もしています。しかしイギリスにはそのような介入をする資源はまったくありません。架空の軍事力なのです。こういう状態は西側諸国全体にとってとても有害です。なぜならイギリスの船が水漏れすれば、我々全員が沈没してしまうからです。

西洋は存在し、好むと好まざるとにかかわらず、私たちはみな西洋人なのだ、とエマニュエル・トッドは強調した。